不自由展再開「無条件こそ」

企画実行委が会見

出品作家「解説変更は検閲」

国際芸術祭・あいちトリエンナーレ2019の企画展「表現の不自由展・その後」の再開をめぐって企画展の実行委員会は26日、「『条件付き再開』は検閲であり、無条件回復こそ自由の証明である」とする声明を発表し、元の展示のままでの再開を求めました。

企画展は日本軍「慰安婦」を象徴する「平和の少女像」などに抗議が殺到し、開幕から3日で中止されました。愛知県の検証委員会（座長・山梨俊夫国立国際美術館長）は25日にまとめた中間報告で再開の「条件」として「展示方法や解説プログラムの改善・追加」に言及しています。

声明は、不自由展の実行委員会が展示説明文に記載した史実を検証委はねじまげて展示空間に反映しようとしていると指摘。不自由展実行委を排除した形も視野に再開が進められていることに危機感を示しています。

名古屋市内で会見した不自由展実行委員会の岡本有佳氏は、不当な攻撃が中止理由とされたのに、検証委の報告は、不自由展の展示内容や方法が原因かのように書かれていると批判。「事前に展示作品や構成、解説文に至るまでの内容に踏み込んで、改変することを条件とした再開は検閲だと思う」と話しました。

アライ＝ヒロユキ氏は、不自由展の実行委は企画展の空間そのものをつくる作家であり「排除されると筋が通らない」と指摘。小倉利丸氏は、現状を維持したままでの再開を強調し、トークイベントなどで議論できる場を設けるなどの対応は考えられると述べました。

企画展「表現の不自由展・その後」の出品作家で、美術家・映画監督の大浦信行さんは「再開は賛成です。しかし、解説文の変更など条件を付けて企画の内容に関与するのであれば検閲になります。企画展実行委としっかり協議してほしい。どういう話し合いになるか慎重に見守りたいです」と話します。

会見する（左から）岡本氏、アライ氏、小倉氏＝26日、名古屋市内

補助金介した国の検閲

美術評論家・府中市美術館学芸員
武居利史さん

展示再開は多くの人が望んでおり、歓迎すべきだと思います。そもそも中止の理由が安全上の問題なので安全確保の見通しがついたのなら再開は当然です。その確認にこれだけ時間がかかったのは大きな損失。早期の再開を求めます。ただ、再開への〝整えるべき条件〟がどのようなものかが心配です。展示の内容に影響を及ぼさないよう、新たな検閲につながらないようにしてほしい。

原状復帰による再開を

日本美術会代表
冨田憲二さん

私たち日本美術会はこれまで、中止に反対する声明や、再開を願う文書で表現の自由への抑圧に対し抗議活動をしてきました。再開への動きは歓迎しますが展示方法を検討する条件がついていると聞き、今後を注視したい。

文化庁が補助金の交付をしないという決定は承服できません。断固として抗議します。

菅官房長官の発言によって公然と補助金が削られる前例ができると、今後、政治的圧力によって、美術展だけでなくあちこちで補助金を削られる例が続く恐れがあります。

10月14日までの会期も残りわずかとなりましたが美術家団体として、再開にこぎつけるまで引き続き要求を続け、原状復帰による再開を訴えていきます。

文化庁が今回の芸術祭への補助金を交付しないと発表しましたが、7800万円規模の支援を前提に進める事業で交付を取り消すなどあり得ないことです。裏を返せば、内容によっては交付しないと文化庁が公言したことになります。補助金を通した国の検閲につながる恐れがあり、重大な事態です。取り消しの撤回を望みます。

アートなめんな

文科省前抗議

愛知県で開催されている国際芸術祭・あいちトリエンナーレ2019への補助金交付を文化庁が取り消したことに対する緊急抗議が26日、文部科学省前で行われました。集まった人たちは、「表現の自由がなくなってしまう」と訴え、「アートなめんな」「検閲反対」と怒りの声をあげました。

文科省前には、「検閲やめろ」などのプラカードが並びました。抗議はSNSで緊急に呼びかけられ、芸術家や芸大生をはじめ約100人余が参加しました。

抗議を呼びかけた、美術ライターをしている島貫泰介さん（39）は、芸術は公共性のある社会的な行為であり、「一つの作品が社会的な議論を呼んだことを理由に補助金を不交付にしてしまえば、芸術の自由や尊厳が損なわれてしまう。絶対に許せない。撤回すべきだ」と語りました。

抗議には、日本共産党の吉良よし子参院議員が参加しました。

再開の決断を知事に求める

愛知県民の会宣伝

愛知県の検証委員会が「表現の不自由展・その後」の速やかな再開を求める中間報告をまとめた25日夜、名古屋市中区で市民ら約30人が大村秀章知事に再開の決断を求める宣伝をしました。主催は「『表現の不自由展・その後』の再開をもとめる愛知県民の会」。

参加者は「一刻も早く元の展示のままでの再開を求めます」「知事に『再開を決断してほしい』と声を上げよう」などとリレートーク。知事と津田大介芸術監督宛てに展示再開を求めるはがきを配布し、賛同を呼びかけました。

「知事は安全の確保に努めて展示を再開する義務がある」と話すのは、東京都世田谷区から来た小林みどりさん（70）。「中止に反対だと表明し続けていくことが大切。黙ってしまうと『こんなものだ』と若い人が思ってしまう」。韓国人と結婚した身内がいると話す70代の女性は「幅広い人たちが再開を求めていることに励まされる。表現の自由を自らつぶすような社会にしてはいけない」と話しました。

「アートなめんな」と声を上げる人たち＝26日、文部科学省前

9/27 赤旗